

令和6年度病害虫発生予察情報 特殊報第2号

—宿根カスミソウでのトマトハモグリバエ初確認について—

薬剤のローテーション散布等、防除対策を徹底しましょう！

令和6年10月24日

発表：福島県病害虫防除所

1 害虫名：トマトハモグリバエ

2 学名：*Liriomyza sativae*

3 発生経過

トマトハモグリバエは、本県では2003年に夏秋トマトで発生が確認され、以後、夏秋露地キュウリ等の作物で県内全域に発生している（写真1）。

2024年7月に福島県浜通り地方の宿根カスミソウで、ハモグリバエ類の加害が認められ、横浜植物防疫所に同定を依頼したところ、トマトハモグリバエであることが9月27日に判明した。これまで、本種による宿根カスミソウへの寄生事例はなく、全国で初めての確認となる。

本種の発生状況を調査した結果、発生が見られる宿根カスミソウのほ場では、幼虫による葉の被害痕が著しく、下位葉～中位葉まで線状潜孔がみられた。

宿根カスミソウでの発生は一部の地域に限られており、現在のところ広域的な拡がりには確認されていない。

4 形態と発生生態

(1) 卵は、長径0.2～0.3mm、短径0.1～0.15mmの楕円形で半透明のゼリー状である。

(2) 幼虫は、淡黄色のウジ状で、3齢幼虫の体長は3mm、後気門小孔は3個である（写真2、3）。

また、葉に不規則な線状潜孔（えかき症状）を形成し（写真4、5、6）、潜孔の末端から脱出し、土中または葉上で蛹化する（写真7）。本県での露地越冬の可能性については不明である。

(3) 蛹は、長さ1.3～2.3mmの俵状で黄褐色である。

(4) 成虫の体長は、1.3～2.3mm、翅長1.25mm（♂）～1.7mm（♀）であり、頭部の大部分は黄色を呈する（写真1）が、外頭頂剛毛の着生部が黒色、内頭頂剛毛の着生部は黒色部と黄色部の境界域にある。

(5) マメハモグリバエやナスハモグリバエに酷似するが、成虫の頭部の配色と剛毛の位置関係により識別可能である。

5 寄生植物

ウリ科、マメ科、ナス科植物等に寄生し、主にメロン、キュウリ、カボチャ、トマト、ジャガイモ、トウガラシ、インゲン、ペチュニア、シロウリ、ヘチマ、マリーゴールド、テリミノイヌホオズキ等において被害が発生する。

6 防除対策

- (1) 本種は寄主範囲が広いので、ほ場内及び周辺の雑草を除去し、ほ場衛生に努める。
- (2) ハモグリバエ類の被害が見られる苗は定植しない。
- (3) 本種は薬剤抵抗性が発達しており、効果の高い薬剤が少ないため、少発生時から防除するとともに、薬剤のローテーション散布を心がける。
なお、農薬を使用する際は、必ず最新の情報を確認し、使用基準を遵守する。
- (4) 施設（無加温栽培を含む）では、側窓に防虫ネット（目合い0.6mm以下）を張ると成虫侵入を阻止できる。
- (5) 冬季に作付けしないハウスでは、ビニールを撤去するなど越冬場所を作らないようにする。
- (6) 密度低減のため、夏季のハウス内の蒸し込みが有効である。
- (7) 被害残さは発生源となるため、ほ場外へ持ち出しビニール等で覆い、蒸し込み処分する。
- (8) ハモグリバエ類を対象とした薬剤防除を実施しても被害が目立つ場合は、最寄りの農林事務所 農業振興普及部・農業普及所か病害虫防除所に連絡する。

トマトハモグリバエの寄生事例がない植物において、本種の発生が疑われる場合は、病害虫防除所又は最寄りの農林事務所（農業振興普及部・農業普及所）に速やかに連絡する。

7 出典・参考資料

侵入生物データベース（国立研究開発法人 国立環境研究所）

(<https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/DB/detail/60030.html>)



写真1 トマトハモグリバエ成虫



写真2 トマトハモグリバエ幼虫



写真3 トマトハモグリバエ幼虫の後気門
(後気門小孔は3個)



写真4 葉の著しい被害



写真5 葉に潜孔するトマトハモグリバエ幼虫



写真6 トマトハモグリバエによる葉の被害痕



写真7 葉上の蛹（左）及び幼虫（右）

病害虫発生予察情報・各種情報は、福島県病害虫防除所ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>

問い合わせ先：福島県農業総合センター安全農業推進部発生予察課（病害虫防除所）

TEL：024-958-1709 FAX：024-958-1727 e-mail：yosatsu@pref.fukushima.lg.jp